

11

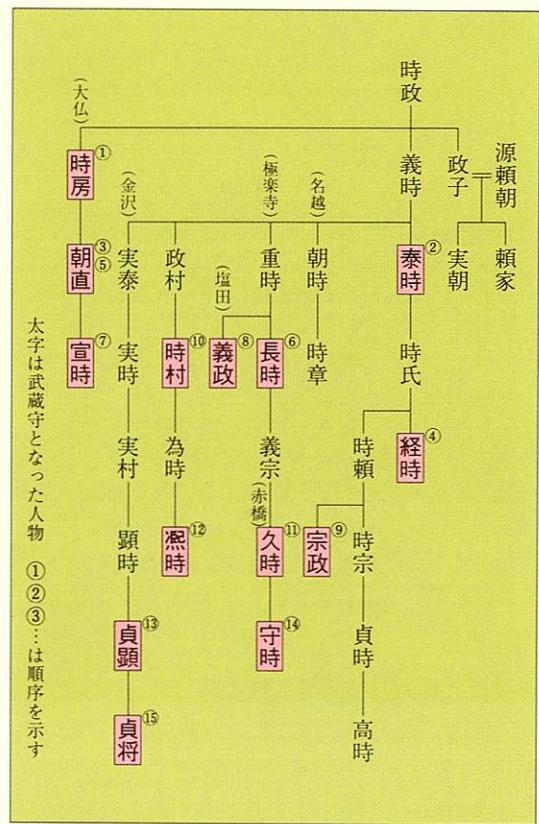
開発される武藏野

■北条氏の武藏国経営

源頼朝は、関東御分国（自らの知行国）には源氏一門を国司とし、武藏国司（武藏守）には信濃源氏の平賀氏を任じたが、頼朝の死後、一二一〇年（承元四）には北条氏が直接支配するところとなつた。北条氏は、時政の娘政子が頼朝に嫁いだことをきっかけに、鎌倉幕府設立の功労者として重きをなしていた。時政は初代執権となり、その子義時が二代執権となつたが、

武藏支配に食指を動かす北条氏は、義時の弟時房を武藏守として直接經營を始めた。北条氏が武藏国が鎌倉防衛のため重要な地域であったからである。

北条氏は時房が武藏守に就任したのを機に、国衙領、御家人領を把握するため、田文（田畠の数量と所持者などを記した土地台帳）の作成



北条氏略系図



鎌倉街道 鎌倉へ通じる古道の総称。特定の路線ではないが、有名なのは信濃に通じる上ノ道、房総に向かう下ノ道、そして中ノ道である。交通の大動脈であった。(『週刊朝日百科 日本の歴史』参考)

域にあつたと思われる) の開発を行つたことが推測される。

三代執権についていた義時^{やまととき}の子泰時は、さらに武藏野開発を進めた。一二四一年(仁治二)十月二十二日に計画された多摩川流域の水田開発は、多摩川に堰を築き堀を掘り、灌漑施設をつくつて水を送り、水田開発を行うという大規模なものであった。泰時がこのように武藏野開発にこだわったのは、当時、天候不順で全国的な飢饉がつづいたため、新田開発を奨励して生産力を高め、食糧確保に万全を期したいと考えたからであろう。また、承久の乱^{じゆくきのあらわ}(一二二一年)以後の勲功賞として与える土地が不足し

を行つた。先に武藏国地頭たちに命じた荒野の開發の成果を把握するといふ意図があつたものと思われる。武藏野の開発は、武藏国統治者として重要な課題の一つであった。北条氏は一二〇七年(承元元)三月二十日に、武藏国の地頭たちに荒野の開発を命じた。このとき命をうけた西党の平山季重は、秋留橋郷(秋川流

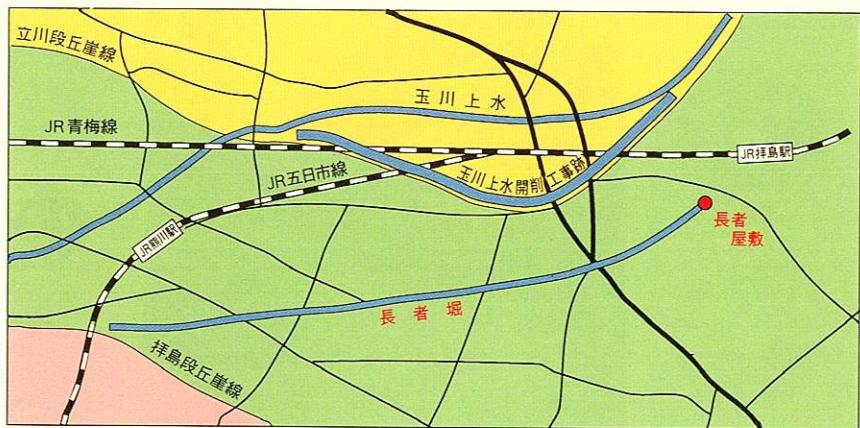
ていたこともあつたであろう。

■長者堀の伝承

時房の時代は、山間部の開発も行われていたと思われるが、泰時の時代は、比較的平坦な土地の開発が行われた。泰時の荒野開発は武藏国全域に及ぶ命令であったから、福生市域でも開発が行われた可能性もある。

これに関すると考えられるのが、熊川の長者堀にまつわる伝承である。

長者堀というのは、熊川七三二番地あたりの窪地から取水して、拝島駅南口下の長者屋敷とよばれたところまで水を引き入れたといわれる堀のことである。江戸時代後期の一七七三年（安永二）に沢応という人が書いた『神光仏言夢物語』という物語のなかに「昔、武藏野に仁智（仁治か）年中に、大野長者といふ福人ありて屋敷回りに堀をほり、当村さる坂より堀をほり、玉川を引き込み」とある。この文章の仁治年中は三代執權泰時の治世であり、泰時の命で大野氏という人が開発にかかわったことを示していると思われる。



長者堀および長者屋敷推定位置図



旧跡 長者力跡（『新編武藏風土記稿』多摩郡之三十一拝島領拝島村）

長者屋敷（昭島市松原町四丁目、五丁目）からは、「永楽通寶」を中心とする中國の錢貨六〇枚と中世のものと推定できる壺、そして板碑が出土している。